資料１

令和３年度 第２回八戸産学官連携推進会議 議事録

日時　令和４年２月14日（月）14:00～15:00
場所　八戸市庁本館４階会議室Ａ

〇司会

ただいまから、令和３年度第２回八戸産学官連携推進会議を開催いたします。はじめに、新たに会長に御就任いただいております熊谷雄一市長より、一言御挨拶をいただきたいと存じます。

〇市長

今、御紹介ありましたとおりに、このたび、会長に就任いたしました熊谷雄一でございます。よろしくお願いをいたします。本日、それぞれお忙しい中お集りいただきまして、誠にありがとうございました。この会のことにつきましては、皆さんの方が十分御存知かと思いますけれども、私も市長就任をいたしまして、この会の内容についてもいろいろ伺っております。（仮称）八戸地域学の創設に向けて取組を進めているというふうに伺っております。

御存知のとおり、今、コロナの影響もありますし、デジタル化の推進、あるいは環境問題への対応など大きな変化のときを迎えておりますけども、そういうときだからこそ、この産学官の連携の会議というのが非常に重要視されていると思います。これまで以上に緊密に連携を図りながら、また、皆様方の御提言をいただきながら市政を運営して参りたいと考えておりますので、今後とも御協力をよろしくお願いいたします。

〇事務局

次に、本日お配りした会議資料を確認いただきたく存じます。本日の会議資料は、次第、出席者名簿、席図、資料１「令和３年度第１回八戸産学官連携推進会議議事録」、資料２「試験配信の結果報告」、資料３「（仮称）八戸地域学の創設に向けた令和４年度計画（案）」となります。過不足等はございませんでしょうか。それでは、議事に入りますので、熊谷市長に進行をお願いいたします。

〇市長

それでは、しばらくの間、議長を務めさせていただきます。まず、「案件(1)令和３年度第１回推進会議の議事録」について、事務局から説明をお願いします。

〇事務局

それでは、「令和３年度第１回推進会議の議事録」について、御説明申し上げます。資料１の「令和３年度第１回八戸産学官連携推進会議議事録」をお手元にお配りしておりますが、本日は要点のみ御説明いたしますので、後程内容を御確認ください。

前回の議事においては、令和２年度の進行管理指標集計結果について、（仮称）八戸地域学の創設に向けた取組（案）についての２項目に関して、委員の皆様から御議論いただき、地域学の創設という取組を小、中、高校生まで派生させていくことが必要であるという御意見や、コロナ禍により遠隔授業の素地が整ってきており、取組を進める好機であるという御意見、地域学の導入にあたっては、既存講義の一部を動画コンテンツに置き換えることで、カリキュラムの改訂を伴わない形、かつ教員等の負担を増やさずにスムーズに導入していけるという御意見、産業・文化・芸能など様々な切り口で学問として構築し、「地域学」としてのモデルにしてほしいという御意見

などを賜ったところでございます。令和 3 年度第 1 回推進会議の議事録については以上でございます。事務局からの説明は以上でございます。

〇市長

ありがとうございます。ただいまの説明に対して、御質問御意見ございませんでしょうか。よろしゅうございますか。それでは、質問等はないようですので、以上でこの案件を終わります。

続いて、「案件（2）試験配信の結果報告」について、事務局から説明をお願いします。

〇事務局

資料 2 及び別紙をご覧いただきたいと思います。こちらは共通講義創設に先立ち、ウェビナー形式での講義を行う際の課題抽出を目的に、八学大の既存講義を試験的に配信した際の結果をまとめた資料になります。上から順に説明させていただきます。1 の概要として、本試験は昨年 11 月 17 日に、八戸学院大学の地域文化論の講義を八戸工業大学に配信する形式で行いました。当日の講師は八戸市是川縄文館の小久保副参事に務めていただき、「世界遺産 是川縄文遺跡群」について講義いただいております。その他といたしまして、試験実施にあたっての条件設定を記載しております。

まず、今回の試験は八戸学院大学の学生が対面で、八戸工業大学の学生が同大学内の教室においてウェビナー形式で受講しております。配信ツールはグーグルミートを使用し、配信画面は講師の PC 上に表示したパワーポイント資料を全画面で表示しました。また、今回の試験終了後、八戸工業大学で受講した学生に対し、講義全体に対する簡単なアンケートを行っております。

続いて 2 の実施結果になりますが、今回の試験配信では、ごく一部音声が途切れることはあったものの、全体を通じて概ねうまくいったものと認識しております。一方、スクリーン上の細かい表示が見えづらくなってしまった点や、講義中に使用していたレーザーポインタが工業大学のスクリーンでは表示されず、説明している箇所がわかりづらくなった点、回線接続の際の各校での操作時に若干のトラブルがあった点を問題点として確認したところです。また、配信側に多数の聴講者がいる環境で試験を行いましたが、音声に雑音が混じるなどのトラブルはありませんでした。

次に 3 の学生アンケートの結果についてですが、別紙として A4 横のスライド資料がございますので、こちらをまず御覧ください。設問は 4 問で、講義全体に対する評価、画面や音声等の環境面に対する評価、今後も受講を希望するかの 3 点について、5 段階で評価する形式としたほか、感想等の自由記述欄を設けております。なお、自由記述欄には、特に環境面に対して改善を求める事項を具体的に記載するよう、学生に伝えております。まず、講義全体に対する評価ですが、5 段階中の 4 が最も多く、次いで 5 が多くなっており、7 割強の学生が良い評価をしたという結果になりました。一方、環境面に対する評価では 5 段階中の 3 が最も多くなり、4 及び 5 と評価した学生が大きく減少しております。今後も受講したいかという設問に対しては、5 段階中の 3 の評価が最も多くなった一方で、5 と評価した学生も全体の 3 割程度存在するという結果になりました。次に、右下のグラフは自由記述欄の記入内容を、講義の内容に関する意見と環境に関する意見に分け、良い感想と悪い感想の内訳として示したグラフになります。内容に関する感想では圧倒的に良い感想が多く、逆に環境面に関する感想では悪い感想が圧倒的に多くなっております。先ほど申し上げましたとおり、学生に対しては環境面で改善してほしい事項を記載するよう伝えておりましたので、環境面に改善を求める意見が多く寄せられることは想定しておりましたが、

内容について好意的な意見が想定外に多かったことは非常に良かった点だと考えております。具体的な記述内容を抜粋して掲載しておりますが、内容に関する好意的な意見で多かったのが、「普段学ぶ機会がない内容で興味がわいた」という趣旨の意見でした。また、環境面に改善を求める意見では、映像・音声の途切れのほか、「音質が悪く、後ろの席では聞こえづらかった」や「教室が暗くてメモが取りづらかった」、「スライドだけでなく、講義の様子を配信してほしかった」などの意見が寄せられております。以上を踏まえ、資料 2 の 3 に戻りますが、講義のテーマや講師の話すスピード、スライドの作り方について好意的な意見が多く、受講者側の満足度に講師側の説明スキルが大きく影響することが示唆されたものと考えております。

最後に 5 の創設に向けた課題になりますが、試験配信は全体として良好な結果が得られたものの、画面表示や音声について、見づらい・聞きづらいという学生の意見が多く、通信や設備等について、会場の規模やスクリーンの大きさ、スピーカーの配置などの環境面の見直しと、ソフト類の操作マニュアルの整備が必要だと考えております。また、講義のテーマとして、学生が興味を持ちやすい話題や、時事的な話題、地域の魅力に関する話題などが効果的であるとともに、講師の選定においても、パワーポイント資料での講義にある程度慣れている人物を選出する必要があると考えております。案件 2 の説明は以上でございます。

〇市長

ありがとうございます。ただいまの説明に対して、御質問ありますでしょうか。それでは続きまして、「案件（3）（仮称）八戸地域学の創設に向けた令和 4 年度計画（案）について」、事務局から説明をお願いします。

〇事務局

それでは資料 3 をご覧ください。こちらは、昨年 10 月に開催した第 1 回会議において、令和 5 年度以降の共通講義としての創設を目指し、来年度より段階的に取組を進めていくこととなりましたので、来年度の具体的な計画について説明させていただくものでございます。

まず、1 の計画案でございますが、令和 4 年度の取組を（1）から（7）でまとめておりますので、順に説明いたします。まず、実施時期ですが、10 月から 1 月上旬までを見込んでおります。実施回数は、年 3 回の予定です。次に実施方式についてですが、中心市街地公共施設で手配した会場にて、一般市民が聴講できる形で講義を行うとともに、各高等教育機関にはリアルタイムで講義の配信を行うウェビナー形式、または事前に録画した講義の映像を配信する録画配信形式のいずれかにより、学生が受講できる体制といたします。テーマは八戸の産業・文化・歴史に関連する内容としますが、先ほど報告いたしました試験配信の結果を踏まえ、幅広なテーマではなく、なるべく特定の分野に注目し、普段知る機会がない分野をフォーカスするようなテーマ設定となるよう、講師と事務局の間で調整いたします。第 1 回の講義は熊谷市長から御講演をいただき、第 2 回及び第 3 回については、産及び学より講師を選出いたします。講師に依頼する講義時間は 60 分から 75 分程度とし、講師 1 名ないし 2 名で分担しての講義を見込んでおります。その他といたしまして、受講した学生へのアンケートを実施いたします。受講したすべての学生を対象に行う予定で、なるべく受講者からの質問にも対応できるよう講師との調整を行いたいと考えております。また、アンケートの設問等については、来年度前半に事務局で作成する予定です。開催にあたっての周知に関しては、例として広報はちのへを挙げておりますが、基本的には各主体が独自の広報誌やＳＮＳを活用して周知を行う予定としております。

次に 2 のスケジュールについてですが、おおよその日程はこちらの表のとおりです。講師の選定及び打診はなるべく 6 月末頃までに行う予定としております。また、9 月下旬頃から、商工会議所会員企業の会合などに出席させていただき、地元企業への本取組の説明及び協力依頼を随時行っていき、令和 5 年度以降の取組に向け、準備を進める予定です。事務局からの説明は以上でございます。

〇市長

ありがとうございます。ただいまの説明でございますけれども今日のメインのテーマでもございますので、この件に関しては御一方ずつ御意見を、あるいは御質問をお受けしたいと思います。

大変恐縮ですが、こちらの方から順次御指名させていただきます。始めに、水野学長からお願いします。

〇水野委員

最初に御指名いただいたので、まずは今回、熊谷市長お迎えしての初めての産学官連携推進会議ということで、どうぞよろしく願いいたします。本題に入る前に、この 4 名の学長は、年に 2 回、この会合でお話しすることが多かったわけですが、今般の新型コロナの感染拡大で、この集まりを軸にさせていせていただいて、大学・高等教育での職域接種を実施することができました。市の御支援をいただきまして、1 回目・2 回目と無事終了し、今般は 3 回目に向けてということで、母体はＳＧグループになるという話ですが、引き続き、若者の三回目の接種に向けて御支援を賜りたいと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

〇市長

はい、こちらこそよろしくお願いいたします。

〇水野委員

今回のテーマ「八戸地域学の創設に向けて」ということで、私自身も非常に興味があり、是非とも少しずつ前に進めていただきたいと思っています。そこへ向けて、基本的にはイベントになってはいけないという思いがあって、学問としてどう位置付けていくかというところで、しっかりと大学のカリキュラムの中で科目として落とし込んでいくのか、あるいは、市民に向けた公開講座として「地域学」という学問を設定して公開していくのか。その辺りも、目標をしっかりと設定して、大学の科目として落とし込んでいくのであればシラバスをしっかり作ってというようなきめ細かな方針も今後議論していただけるといいかなと。市民の公開講座でも、イベントとして 1 回で終わるだけではなくて、何段か積み上げていくと単位の修得に繋がって、修了証等もらえるとか、そういうプログラムとして将来像を描けるのかどうか、そのあたりも今後議論していただけるといいのかなと思いました。

今回、八学大では、対象は 1 年生で、健康医療学部人間健康学科と看護学科の学生が約 200 名弱は受講していたと思います。八工大さんの方は、どういう学科で何名ぐらい受講されたでしょうか。

〇坂本委員

1 年生で、学部学科問わず 80 名ぐらいです。

○水野委員
　ありがとうございます。本学も 1 年生でしたが、この学問を例えば大学のカリキュラムの中で落とし込んでいくとしたらどういう形が可能なのかというところも、今後の方針の中で議論して協議していただけると非常にいいのかなと思って、報告と提案をさせていただきました。以上です。

○市長
　ありがとうございます。すみません、ちょっと初めてなので。今出されたような意見というのは、ここで協議をするものですか。それとも持ち帰りになるということですか。

○事務局
　事務局の方でお伺いしたものを、御提案なり、検討事項につきましては、私どもの方でお引き受けいたしまして、後ほど会議の中で提示をするという形を取らせていただいております。

○市長
　そうですか。かしこまりました。では、目標設定等々については事務局の方で。

○水野委員
　ありがとうございます。

○市長
　それでは、続きまして、杉山学長お願いいたします。

○杉山委員
　はい。目標ということで、単位化するかどうかというのは大きな問題だと思いますが、短大でもし単位化ということになれば、やはり対象学生は 1 年生ということになるかと思います。ただ、今回、試験配信の対象にはなっていませんが、2 学年しかありませんので全学生を対象に、録画であれば全員視聴させることも可能ですので、是非全員に体験させたいと思っております。
　短大は幼児保育学科と介護福祉学科ということで、教養科目ももちろんありますけれども、どうしてもいつも保育の話、いつも介護の話みたいに専門分野の講義に偏っているところがあるので、逆に全然違う内容の授業とかありますと、学生がとても新鮮に感じるからか授業の評判が良いということもあります。殆ど地元の学生でもありますし、是非そういう経験をさせたいと思っております。
　また、八戸地域学とリンクしていますが、これとは別に、短大の方で令和 5 年度にカリキュラムを変えることになっております。令和 5 年度のカリキュラムの中で、元々短大では地域におけるさまざまな活動、ボランティアや地域行事への参加とかが多くありまして、それをカリキュラム外の活動としてやっていたのですが、それらを単位化して、地域学の実践のような形で科目を作ろうと思っております。それと、ここで企画されております地域学をリンクさせる形で、短大の教育の 1 つの柱にできればと思っております。
　また、先ほど水野学長の御提案にありました、市民の方が受講されて、プログラムとして修了証を出せるような、そういうのはとても良い案ではないかと感じているところでした。以上です。

○市長
　ありがとうございます。続きまして、圓山校長お願いいたします。

○圓山委員

八戸学というは非常に大事な学問で、本校の学生には是非聴講させたいと思っております。1年生というのは高1と同じなので、4年生か3年生で考えておりますが、7年間で大学4年まで詰め込むので、カリキュラムがかなり過密で、その中で「地域学」をどう位置付けるかというのは悩ましいところです。その辺はちょっと調整させていただいて、一般科目の中に入れるとなると、低学年で早いうちに植え付ける方がいいように思いますので、1・2年生のどこかの科目の中に入れるというのも1つの考えかと思っております。

また、杉山先生がおっしゃいましたように、市民に開放するというのは非常に良いアイデアだと思います。私が仙台にいたときに、サイエンスカフェという一般市民向けの講座のようなものを行いました。本当は高校生をターゲットにしていたのですが、蓋を開けてみると御高齢の方の参加がとても多くて、御高齢の方はそういった知識に飢えておられるというのがございますので、そこを市から提供するというのは、1つの可能性としてあると思いました。

もう1つ、これが大学のカリキュラムであるという事実があることが意外とプラスになるのではないかと思っています。インターネットで探すといろんな情報が見つかる時代で、探せば大学の私の講義もインターネットで見つかったなんてこともありますが、地域のもっと学びたいという方にとって、大学のカリキュラムと同じ講義を聞いているという意識を持つことは、結構アトラクティブで大事なことだと思いました。つまり、高等教育機関がクローズに大学の中だけで単位のやり取りをするのではなく、一般の市民の方にも聞ける内容でかつ、先ほど杉山先生おっしゃったように、なんらかの形で修了証のような形で出せるとか、いろんなものがあると思いますが、そういう形にするといいと思っています。

一方で、大変なのはそういう取組をやっている事実を市民の皆様にお伝えすることで、広報はちのへに載せるというのはもちろんですが、どういう形のメディアに載せれば、一般市民の方に聞いていただけるか、そのやり方について、今は明確なアイデアはないですが、看板は掲げたけど誰も聞かないなんてことにならないように、その辺の作戦を練らないと思います。大学であれば、学生に地域学の聴講が単位取得に必要だと伝えるだけでいいわけですが、一般の方にどういう形でお届けするのか、それが一工夫いると思っていました。以上です。

○市長

ありがとうございます。続きまして、坂本学長お願いいたします。

○坂本委員

まず、この資料3に書かれてある事務局の方でだいぶ御議論されてまとめられたということで、基本的にこういった形でやるということにとても賛成しております。本学は4月からカリキュラムが新しくなります、50周年ということもありますが、その中で、間違っていたら御指摘いただけると思いますけども、1年生に北東北の地域学というのを学部横断教育の機会を作っておりまして、そこに選択科目にはなりますが、受講できるようにするということで後期スタートします。その中に、例えば（5）に書いてありますような市長さんから御講演とか、2回目以降、産学より1名ずつという形で学生さんに教育するというのは非常に素晴らしいなと私は思っております。特に、先ほど例として試験配信という話が出ておりましたけれども、私もその中に入っていって授業を聞かせていただきました。学生さんが真剣に画面を見ていて、薄暗かったので手元でメモを取るという形ではありませんでしたが、長いこと聞き入っていたという印象が大きくて、学生

さんに試験配信というか、これをやっていることの意味ですとか、それから意義ですとか、こういったものを伝えることによって、学生さんたちも積極的に前に出て学ぼうとするということがあるのではないかと思っているところです。そういった意味で、今回の試験配信というのは成功したと思っています。ただ、映像とか音声とか、様々なところで課題がある。これから、もしいろんな形で令和 4 年度にやるとしても、たぶんまたいろんな課題が出てくるとは思いますが、それを乗り越えて、地域で産官学が一緒になって若者を教育するという形で、これから事業がどんどん進展していければいいなと夢を描いているところでございます。

それから、先ほどから一般の方々という話もありますが、例えば、生涯学習の一環として学生さんと共に学ぶという若々しい気持ちになって向かっていける、そういったことができる八戸市というのも外部へのアピールに繋がっていくことかと思いますので、なんとしてでも成功に導いていければと考えているところでございます。以上です。

〇市長

ありがとうございます。それでは、河村会頭からもお願いいたします。

〇河村委員

いろいろお話いただきましてありがとうございました。私どもとすれば産業・経済の方が先に立ちますので、できれば八戸の産業の種類とかあるいは勉強というものに対して理解してもらいたいと思っています。それから、地元の産業のことを知れば、できれば八戸で作った、八戸でできたものを、多少高くても買ってほしい。ある講師から言われたのはスイスの例で、スイスは人口が少なくても地域が豊かであると。その先生曰く、八戸でも八戸産のものを買ってもらえたら、おそらく 2000 人ぐらいの給料を払える収益がでる。それが東京なり大手の一流企業のものを買われるとなると、その分が東京とか大都市に戻ってしまう。できるだけ地元のものを地元の人が使って経済を循環させると非常に効率がいいということと、八戸辺りの人口でいけばおそらく新たに 2000 名の雇用ができるはずだと。その先生が計算すると、約 2000 名の新しい雇用ができると。そうなると、八戸の産業は非常に落ち着くというような話を聞いた記憶がございます。それらを考えると、我々の地元の産業というものを、自分たちでは発信しているつもりではありますが、なかなか実際自分の懐から金を出すとなると高いものは買ってもらえない、できるだけ安いものを買うということになってしまうので、地域の経済効果というものは、私どもは商工会議所で Buy はちのへ運動というのをやっていますが、なかなか市民の方々の生活に浸透していかないという非常に難しい状況です。私どもとしても、それらをどういう形で今後進めていくかということになると、産学官の方々からまず御理解いただいて、それを広めていかなきゃならないというのは実感しております。商工会議所でも Buy はちのへ運動をやっていますが、一時は凄く良かった時期もありましたが、最近それが通らなくて、非常に中小企業の方々、コロナを含めて厳しい状況にあるということで、この産学官で少しでも浸透して、学生さんも含めて理解してもらえればいいなと感じております。以上です。

〇市長

ありがとうございます。皆様方からいろいろと御意見を頂戴いたしまして、事務局の方でまとめて今後に活かしていただきたいと思います。それから、私の方から一言ということになっておりますけども、実は冒頭申し上げましたとおりに引き継いだばかりですけれども、今朝、今日の最初の案件でありました前回の議事録について読んでまいりました。その中で、既に皆さん前向

きないいお話をされておりまして、例えば水野学長の方からは、大学だけではなくて系列の高校の方にも落とし込んでいくべきではないかなという御発言があったり、圓山校長先生の方からは、今のこういうコロナの時だからこそオンライン授業に慣れてきているので、取り組みやすいのではないかというような御発言があったり、坂本先生の方からも、こういうことをやりながら地域の若者を育てるということは八戸にとっても素晴らしい姿勢だというような御発言もあっております。加えて杉山先生の方からも、地域学があるということが学生の教育の重要な柱として位置付けられるということは非常に良いことだというような御発言もございました。今日の御発言の中でも、さらに今度は一般市民へ開放をして、こういうことを八戸でやっているということが非常に意義のあることではないか。特に高齢者の方々ということもございました。全くその通りだと思いますし、やるにあたって情報発信の難しさという御発言もございましたけれども、やり方はあるような気がいたしますし、こういうことを学びたいという団体もあると思うんですよね。そういうところにどんどん情報発信をして勉強していけば、広げていけるのではないかなというふうに思います。

実は、先週の土曜日にですね、若者マチナカ会議という高校生から一番上の方で40後半の方もいらっしゃいましたけども、女性そして若者を中心としたまちづくりに対する思いを語る会がありましたが、その中の結論の1つといたしまして、若いうちからまちのことを知ることが大事だと、そしてまちを良くしたいという気持ちを育てていくことが大事だということと、若者同士が繋がることも大切ではないかというような発言が若者の中から出ておりました。まさにこの学というのは、地元を知る、地域を知る、そして若者同士が繋がるという点からも非常に意義がある会議だと思っておりますので、それぞれの学校で、大学で事情があろうかと思いますけども、その辺は上手く調整をしながらですね、この事業を進めていければなというふうに思っております。私からは以上でございますが、あと何か事務局の方から補足とかはございませんでしょうか。

〇事務局

その他、何か皆様からあれば。

〇市長

その他、何か。

〇水野委員

何か、事務局、いろいろ出てきた点に関して事務局で議論していたこととか、もう既にこうことは議論始めていますとか、ざっくりで申し訳ないけど、話題になったような点で何か補足することは事務局からありませんか。

〇事務局

今のところは、本日御提案申し上げた点がこれまで事務局で議論してきたこと全てでございますので、補足する点はございません。

〇市長

それでは、せっかくの機会ですので、私の方から1点発言をさせていただきます。先ほど、会頭の方から産業への理解というお話がございましたけども、実は、この地域・産業を担う人材育成さらには高校生・大学生の地元定着のためにも、県の教育委員会等々で産業教育を始めておりますが、是非この点につきましても皆さんの御意見御協力をいただきながら、八戸における人材

の育成と地元定着に繋げていきたいというふうに個人的には考えております。特に今年、全国産業教育フェアとか全国大会が青森県で行われることになっておりまして、地元の企業も何社か関わりをもっているはずです。ですから、この機会も捉えてですね、八戸においての産業教育ということに力を入れていきたいなと思っておりますけども、もしこの点について御意見等々があれば承りたいと存じます。いかがでしょうか。

○圓山委員

口火を切るということで、呼び水程度に聞いていただければと思います。産業は非常に大事だと思っております。八戸は青森県の他都市に比べると頑張っている方だなと私は思っていますし、人口減少も大きいですけれども隣のおいらせ町では増えていて、いわゆる八戸地域ではそんなに減っていないと私は認識しております。この辺は何が原因か考えると、地域に産業、昔みたいに大きな会社を誘致するとか、そういう話ではないと思いますが、やはり働く場があって、もちろん八戸学のような形で知ってもらうのも一番ですが、やっぱり働く場があって、そこで給料がいいというのが大事なところだと。本校、残念ながらかなりの学生が関東圏に行ってしまいます。他大学さんでも同じだと思います。それで、戻ってこようとすると給料が安い。もちろん生活費も安いと言いますが、総合計画の関係のアンケート結果を見ると意外と安くない。つまり、車とかは必須で、その維持費を考えると、アパート代が多少安くてもあまり関係なくて、そんなに簡単なものではないという話がございます。多様な産業、もちろん漁業も含めて活性化して、若者たちに働く場をつくるというのは都市の地固めというか、そういった部分を上げるためには凄く大事なのかと。幸いなことに八戸市は交通の要所でございますので、物流ですね人だけではなくて。確か総合計画に書いてあると思いますが、東京から八戸と、東京から大阪って新幹線でそんなに変わらない。15 分ぐらいしか違わない。ですから、ちゃんと行き来できる場所なので、ビジネスチャンスがいっぱいある。なおかつ、残念ながら青森県は 2 番目ですか、1 番目ですか、平均人件費が安い。その割には、南部の人たちは一生懸命働いて離職率は低いというのがありますから、自虐的ではありますが、地域の産業を活性化して受け皿をつくるというのも根本的には重要じゃないかと思っています。

それからもう 1 つは、本校でも実施していますが、一旦みんな若者は東京に行きたがる。青森県だと東京というのは茨城ぐらいまで東京だと言いますが、日立とかの大企業に行くわけです。そんな中、関東の大企業に行って、でも合わないで戻ってきたいという学生は結構多い。そういう方を上手く捉えて地域に戻すと。この辺の中小企業の中で活躍している人の多くが、一旦東京に出たけど戻ってきて社長を継いだとか、いろいろやって頑張っている方がすごく多いので、戻ってくるのを上手く捉えるやり方というのも考えていく、そういうのもあるのかなと。一例申し上げますと、本校では 2 年前か 3 年前に財団を作りまして、卒業生に対する再就職の支援を細々としてやっています。本校の卒業生で一旦就職したけどいろいろな都合で戻ってきたいという方と地元企業を繋いで、今日も 1 つ内定が決まったと聞いています。戻ってくる取組を支援する、それも 1 つのやり方だと思っています。以上です。

○市長

ありがとうございます。1 回県外に出て行ってた若者に対して、情報をどんどん発信をして、こちらに戻ってくる取組も当然必要になってくると思います。よく言われるのが、これだけの産業都市でありながら意外と高校生、保護者はそんなことはないかもしれませんけども、学校の先生

方が地元の産業について意外と知らないということも課題としてあげられておりまして、そういうことを知っていただくためにも産業教育の現場が必要じゃないかと考えています。

○水野委員

実は事務局から、市長から質問が出るから予習してこいと言われており、まとめた資料がありますので、1枚取っていただいて、残りを回していただければと思います。

これは、地域経営学部の教員と議論を始めたところで、こういうことをテーマにして議論していますというものです。今、SDGsということで世界の課題を地域に落とし込んで、この地域の未来をどう描いていくか。今からその先を見据えて考えていかなければいけないかなというときに、八戸圏域の未来像をどう描くかというのが上の図です。下の半分は、ある程度イメージを八戸圏域に落とし込んだときに産業教育が何かというと、この3つのトライアングルのそれぞれの頂点に関わる人材、そして中心になってくれる中心街を支える人材をしっかり育成していくというストーリーになっています。トライアングルは何かというと、一番上の図ですけれども、これは経済評論家の内橋克人、昨年亡くなられたんですけれども、「グローバル資本主義というのは光の部分もあるけども暗い部分もある」ということで、格差とか貧困とかそういうところですね。そういう経済政策から理念型経済へということで、実はこのモデルになった国というは、私が1980～2006年まで26年間生活していましたデンマークという国をモデルにして論じていたので非常に興味を持って触れたところです。地域でしっかり自立しようと、また、自立する過程として、まず食料をしっかり確保するの「F」、そしてその地域で関わる介護・医療・福祉・教育の人材もその地域で育てていこうという、他の地域に頼らずに、青森県は食料自給率が非常に高いです。そこをしっかり確保していって、人もそこで育てる。そして、もう1つはエネルギーだと。これからも非常に議論になっていくと思うんですけれども、自然再生エネルギーをしっかり使って賄えられるのか賄えられないのか。そういうエネルギー論、しっかり次世代を育てていこうという中で、本学は「Care」の部分あるいは食料に関わってくる部分も考えていますが、やはりエネルギーに関わってくるとやはり工大さんあるいは高専さん協力してということで。これが全てではないですが、こういうことにしっかりと重きを置きながら将来を描いていって、そこに目がけてしっかり人材を育成するということが1つ産業教育の今後の関わり方と思っています。

ただ、これはデンマークのような500万の国で、九州ぐらいの大きさの国で成立できているわけで、日本のような大都会では通用しません。ですから、日本の国家論としては評価されない部分もあると思います。ただ、こういう考えを八戸圏域に落とし込んでいったときに、このトライアングルの一番ど真ん中にあるのが八戸市の中心街だと思っています。ここがしっかりと活性化することによって頂点をしっかり支え、うまく融合させていく。そういう思いで「Food」の部分でいいますと、例えば八学大は水産高のマグロという、八学大の学長は冷凍マグロに熱いという話なんですけども、決してマグロが美味しいからマグロと言っているわけではなくて、変わってきている海の豊かさを新しく見つける策はないのかというのが1つ。あるいは、自給率の非常に高い八戸圏域と連携として、8baseで商品開発あるいは販売促進というプログラムも立てています。そういうことに関わっていく人材を育成していく。「Care」は我々がしっかりこれからも進めていく部分ですが、やはりエネルギーに関しては、例えば今回テーマにあった八戸地域学等で工学部系の話をきちっとやっていただいて、基本的にはこの地域に愛着があり誇りがあり、そして理解を深め魅力を感じて地元に定着していくという教育を大学・高等教育機関が目指して、少しでも高校・中学にも落とし込んでいく。そういうような未来像を描きながらやっていけたらいい

のかなと。今日たぶん都市研でもテーマになると思いますが、八戸市の中心街をどう活性化するか。これを単発的に考えるのではなくて、もっと総合的・一体化になっていく。八戸の魅力といったら文化・民族芸能もあります。そしてアート・スポーツ・グルメ、こういうのを一体化して、ではどういう策が考えられるのかということを議論していってはいいのではないかと。個別にやるといろいろ議論が大変ですし、さらにそれを総合的になるともっと大変ですけども、何かしっかり夢を見据えていかに活性化していくか。八戸市の中心街を活性化することによって関係をしっかり構築できて、今回のようなパンデミックや自然災害などが起こったときも、この圏域の皆さんが安心安全をしっかり支えて、余力があれば周りを支えていくという将来像もあるのかなあと。とにかく夢物語でちょっと。私だけではなくて補佐とも議論しておりますし、地域経営学部の教員で、こういう将来像を描きながらどういう人材を育てていくかということを今議論しているところです。失礼しました、ありがとうございました。

〇市長

事前に準備いただきまして、ありがとうございました。それでは、せっかくですので杉山学長からもよろしければ。

〇杉山委員

短大は幼児保育と介護で、水野先生の図でいうと「Care」のところに当たります。先ほど圓山校長のお話しで、若者はみんな東京に行きたいという話がありましたけれども、幼保と介護の学生に関しては、介護の学生は奨学金の関係もあってほぼ地元100％で、幼保については1～2割ぐらい、やっぱりそっちに行きたいという子もいますが、地元志向の学生が多いです。それは、行きたくても行けないという事情もあるかもしれませんが、やっぱり子どもとかお年寄りとかに携わりたいという仕事を選ぶ気持ちというのが、地元が好きとか、家族が好きで離れたくないとか、そういうことと一体になっているところがあって、地元で働きたいという学生が多いものと思っています。ただ、ちょっと悩ましいのが、特に介護の方で、保育は昔からお給料は安いわけですが、最近はお陰様で国の方針でだいぶ上がってきたこともありますし、子どもと特に女性の場合、幼児教育とか保育に携わりたいという学生は多分一定数ずっといるものと思っております。ただ、介護については、そういう気持ちを持った人、お年寄りを支えたい、おじいちゃんおばあちゃんを大事にしたいとか、そういう気持ちを持った子どもなり生徒なりはいると思いますが、それが介護福祉士とかを選ぶという職業選択と必ずしも結びついてない。例えば、高校の先生にむしろ止めた方がいいと言われるとか、家族が反対するとか話があって、とても素晴らしい仕事ですが、いわゆる職業としてお給料だったり待遇だったりというので必ずしも魅力的になりきれてない。実際には、法人なり施設によって非常に差があって、とても良い仕事、ちゃんと地元で安定した生活ができるお給料が確保されているという点で良いところもあって、そういうところを押しているわけですが、必ずしもそういうところだけではなく、新聞とかにブラックな面が報じられることもあり、改善していこうというつもりもあり、マスコミには出るのだと思いますが、でもそういうのが出ると結局やっぱりまだまだ駄目かという印象もあったりしますので、そこは地元で福祉産業といいますか、高齢者施設はどんどん増えていますし、これからも暫くこういうのが続くと思いますので、介護福祉士、介護に携わる姿勢が職業として魅力的であるように学校だけではできませんので、是非地域全体でよろしくお願いしたいと思います。

〇市長

ありがとうございます。それでは、坂本学長お願いします。

〇坂本委員

今、三方から素晴らしいお話を伺ったところで、私は特に準備はしてきてはおりませんでしたけども、産業への理解ですとか産業教育ですとかそういういった視点を考えるときに、今日は全然勉強してきてないのでうる覚えの話ですが、やっぱりここに私は歴史的な側面をどうしても入れたがるというかですね。例えば、八戸というのは漁港があって水産業が盛んな都市だというときに、じゃあ、その港湾がきちんと出来上がってきたのはいつの頃からなのかと考えたときに、もしかしたら明治天皇が御巡幸されたときに一緒に付いてきたオランダ人のムフデルさんが港湾を測量して、八戸ではこういうふうにやることによってさらに盛んになるという歴史や、それから南部藩のことですが、八戸の街並みのところでウナギの寝床があって、なぜ道路に面して細長くて開口が狭いかといったときに、なんとかあるのだそうですよね、税金じゃないですけど何かあるんですよね。私はそれを聞いたとき、面白いなと。そういった歴史があって、そこに住んでいる人たちがいろんな思いで産業を動かしていくわけですよね。それを理解しながら八戸ってそういう地域だったのか、南部藩でも八戸取り潰しになる場面があったにも関わらず復活してここに八戸があるという事実とか。こういったことを皆さんで、八戸は素晴らしいところなんだよと伝えることが大事かなと思っていまして。私、学生さんと話をしていて、八戸ってなんもないじゃない、つまらないじゃないと言われると、そうじゃないと言うわけです。そうすると、ああそうなのかという場面を何回も経験していますので、そういうことをいつも私ここで言いますが、学生さんたちだけじゃなくて市民の方とかがみんな知ることによって、八戸って凄いところなのか、素晴らしいところなのかと思えるんじゃないかと思います。私、出張すると博物館行くことがよくあって、その都市の博物館見ているときに、言葉はあれですけどつまんないかつまるかって話で、八戸ほど面白いところはないなと思う場面がたくさんあります。私はぜひ伝えたいなと思っています。戻りますけど、若い人たちへの産業教育というものに文化的なあるいは歴史的な様々な視点を入れて、皆さんに幅広く地域を知ってもらうというのがいいなと感じております。雑駁な話でした。

〇市長

ありがとうございます。最後に会頭からも、もしよろしければ。

〇河村委員

非常に痛いところを付かれました。簡単に言えば、こういう言い方が良いのか悪いのか分かりませんけども、どうしても先を読む力というは、中小企業が多い、弱小企業が多いからなかなかそういうのを掴めない。いわゆる目先の生活に追われてるという感じで、先々の夢とか追える状態が少ないのではないかと思います。ただ、先ほど坂本さんがおっしゃった話で、県外だけ比較して言えば、八戸はボランティアとかですね、みんなで集まってみんなでやろうという意識はえんぶりにしろお祭りにしろ、全部地元の住民だけで自分の手を汚しながら作っているわけです。ねぶたにしろ、弘前の方から見ると、みんなお任せですよね。ですから、例えば三社大祭の夜の合同運行とか、市から補助を貰っていますが、基本的に全部市民でやっている。あるイベントをやったときに、もの凄く集まりがいいのは奥さんたちが来る。うちの旦那に言い訳が付く理由を探してくれ。主催者側にくるのは、うちの旦那にここに行っていいよという言い訳を作ってもらいたい、そしたらなんぼでも連れてくるっていうのは、昔から手作りで、ねぶたとかと違ってプ

ロがいない。全部町内の人たちが集まって、夜遅くまで手作りでやっている。そういう意味でのコミュニティというのは、八戸は凄いなと感じています。例えば、青森・弘前でもそうですが、ほとんどがお任せです。RAB 開発とか企業などに丸投げして、それを持って来てお祭りに参加している。八戸は町内会でやっている。この辺が地域の個性だなと思っています。ですから、そういうコミュニティを上手に活かしたようなまちづくりを考えていきたいと思ってやっていますが、なかなか難しい。

それからもう 1 つよく言われるんですけども、東京とか様々行って、私の同級生よりずっと下の方だったけど、若い人はやっぱり賃金ですよね。賃金格差が大きいと。果たして八戸に帰って生活できるかできないかそれが不安だというのが、私より下の年代がよく言う。八戸に来て少し盛り上げてくれと言うと、うん分かったと言いながらなかなか来ない。給料のいい、条件のいい会社を自分で探せない。やっぱり一番賃金格差がこっちに働く人たちの格差になってきているなと感じます。八戸というのはコミュニティ社会で、日本の稀な地域だと思います。みんなが汗水流して、三社大祭のときも全部手作りで、町内の人たちが集まって夜遅くまで徹夜でやったりですね、私も若い頃は徹夜で山車づくりやったり、えんぶりやったりしてきましたので、コミュニティ力をどういう形で活かしていけばいいのかなと感じています。以上です。

〇市長

ありがとうございます。いろいろ御意見を頂戴いたしまして、ありがとうございました。事務局の方で、本日いただきました各御意見を踏まえて取組等について検討を進めて、次回の会議にて御報告いただければと思います。八戸地域学創設、令和 4 年度計画（案）ということで、私が第 1 回目の講師ということですが、先ほどの試験結果の課題の中で、パワーポイント資料を使用した講義に慣れている講師が望ましい、そこには慣れてないものですからそのことも踏まえて御案内いただけたらと思います。それでは司会の方へ進行をお返ししたいと思います。

〇司会

ありがとうございました。最後に、今後のスケジュールの確認でございますが、次回は令和 4 年 10 月頃の開催を予定しております。開催が近づきましたら、改めて御案内差し上げますので、どうぞよろしくお願いいたします。

それでは、これをもちまして、令和 3 年度第 2 回八戸産学官連携推進会議を終了いたします。本日はありがとうございました。